

# 特集 『部落解放と国際連帯』

日本に新来の外国人が急増する。広島でも然り。外国人労働者・企業研修生・日本人配偶者・それらの家族。

滞日・在日する外国人が多様化する。外国人問題が噴出する。労働問題から定住問題へ。滞日・在日の経過とともに、問題が深まり、広がる。そして、それらの問題は、「共生」を容易に許さざる現代日本の相貌を照射する。

また、明治以降の日本人の、朝鮮人・中国人等の外国人との出会いの歴史に学ばざる近代日本の相貌を浮きぼりにする。

部落解放運動と同和教育運動もまた、部落差別との闘いの只中、職場で、地域で、学校で、外国人問題に遭遇しつつある。部落差別の問題は、外国人問題とどこで、どうふれあうのか。水平社の闘いの、アジアの闘いとどの連帯の歴史的経験は、どう活かされるのか。そして、国際連帯を可能とするような部落解放の思想とは、いかなるものか。国際化状況のなか、部落差別との闘いは、新

たな戦線での展開をよぎなくされている。

私たちは、このような問題意識のもと、一九九五年、広島部落解放研究所の活動の一環として、研究会『部落解放と国際連帯』をつくった。そして、外国人・外国人問題に取り組む日本人を囲んで研究会・研究集会をもった。

私たちは、それらの研究活動のなかで、三つのことを学んだ。一つ、(広島でも)滞日・在日外国人は、職場・地域・学校・家庭におけるさまざまな問題を抱えて、苦闘しているということ。二つ、それらの問題は、外国人受け容れの局面に表れた日本の文化・社会の構造の問題であるということ。すなわち、外国人問題は、日本人問題であるということ。三つ、その文化・社会の構造は、他方、日本人のなかで、部落差別を産み出しているということ。すなわち、外国人問題は、日本の文化・社会の構造の前近代性を介して、根底において、部落差別問題

に繋がっているということ。

このような経緯にふまえ、ここに、「部落解放と国際連帯」と題する特集を組んだ。そして、在日外国人の体験・活動報告、外国人をめぐる日本人の活動報告、外国人をめぐる調査報告を掲載することができた。私たちは、それらのなかに、上の三つの論点の具体的な展開をみることができる。

そして、これらの報告から、私たちは、日本の文化・社会の構造をめぐる、さらに三つの理論的意味を抽出することができると考ええる。

一つ、多くの外国人労働者が来日しつつあるが、彼ら・彼女らが担う「単純労働」と称される労働は、これまでに日本人の勤労大衆によって担われてきた職種・労働であること。そして、その勤労大衆の中心に「主要な生産関係から除外」された被差別部落大衆が位置してきた。すなわち、今日の労働市場において、外国人と日本人大衆は、低賃金と厳しい労働の担い手として、たがいに補充・代替関係をなす。海外に進出した日本企業に雇われるアジアの勤労大衆を含め、日本の勤労大衆は、外国人と構造的に繋がっている。

二つ、外国人問題の核心に、イエ（家）に対する日本人の共同幻想に基づく排外主義があるということ。これ

は、とくに日本人と結婚した外国人女性（たとえばフィリピン人や韓国人）が、家庭・地域生活のなかで抱える悩みとして、集中的に顕現している。「日本人と結婚したのだから、日本人になりなさい」という日本人の「要求」が、外国人のアイデンティティを根底から奪い去る暴力として、彼女たちに襲いかかっている。そして、このイエに対する共同幻想こそ、日本人のなかにあって、部落差別に象徴される排除の規制として作用しているものである。

三つ、日本人の外国人をめぐる認識の構造が、浮きぼりになるということ。認識の構造とは、次のようなものである。まず、日本人の外国人認識は、日本人自身の自己認識にほかならないということ。自分が何者であるかは、他人が何者であるかについての認識のなかで形成される。すなわち、日本人という自己認識は、近代以降に形成された欧米人観・アジア人観の対応物として形成された。日本人の自己認識は、（多くの場合）アジア人に対する優越・蔑視感情をぬきに存在しない。次に、日本人は、あらゆる人間集団をウチとソトに分離する心性をもつ。たとえば、日本人はミウチで、外国人はタニンである。そして、その上で、ミウチとタニンのそれぞれの集団を、ウエとシタに差別化する。一方で、日本人自身

が、天皇を頂点とする身分観念によって差別化される。この底辺に、「部落」が位置づく。他方で、外国人が西歐人を頂点とし、(東)アジア人を底辺とする序列構造のなかで差別化される。ここでも、部落差別意識と外国人排斥の意識は、日本人の集団的分離と序列化の規制を介して、繋がっている。

これらの理論的解釈は、いまだ一つの仮説にすぎない。「部落解放と国際連帯」をめぐる課題の理論化の作業は、緒に着いたばかりである。しかし、今日の国際化状況のなか、日本人論・日本社会論としての外国人問題の研究は、研究・実践のいずれにおいても、ますます緊要な課題となっている。部落解放の闘いは、いかにして国際連帯をなしうるか。そして、国際連帯という武器をもって、いかにして日本社会の前近代的・権威主義的な差別構造の変革をなしうるか。

この展望を切り拓くこと、これこそ、いまだ力に乏しいわが研究会の目的である。本特集が、そのための一歩となることを願ってやまない。

(青木)

